公益財団法人日本陸上競技連盟
陸上競技研究紀要
第19巻, 213-216, 2023
Bulletin of Studies in Athletics of JAAF
Vol.19,213-216,2023

第19回アジア競技大会（2022／杭州）帯同報告

鎌田 浩史[1)2)]
1）公益財団法人日本陸上競技連盟　医事委員会　　2）筑波大学　医学医療系　整形外科

【はじめに】

2020年より世界を巻き込んだ新型コロナ感染症の影響により、オリンピック2020東京大会をはじめとして多くのスポーツ競技会が延期となっていた。アジア大会は4年ごとに開催され、前回の2018年ジャカルタ・パレンバン後、本来であれば2022年9月に第19回アジア競技大会(2022／杭州)が開催予定であったが、本大会は1年遅れて2023年9月23日～10月8日に40競技481種目、陸上競技は9月29日（金）～10月5日（木）に開催されることとなった。今回、チームドクターとして帯同し、選手のメディカルサポートを行ったので報告する。

【大会の概要】

杭州市は、中国浙江省の省都で上海から170km程度南にある人口1000万人、中国の中でも8大都市に入る大きな都市である。（図1）日本からは、上海国際空港まで約3時間のフライト、そこから杭州まではバス2時間半程度の距離であった。

アジア大会における日本の選手・役員は1138名であったが、陸上競技は、選手55名（男性34名、女性21名）役員22名、合計で77名が参加した。メディカルスタッフはドクター1名、トレーナー3名（男性2名、女性1名）の計4名にてサポートを行った（図2)。

日本より南の地域であり、少し暖かいことを予想していたが、10月になっていたこと、天気も曇りがち～雨の日があり､気温が少し低い印象であった。大気に関しては大都市で影響もあるのか、PM2.5の指標が高く、なんとなく競技場内もくすんでいる感じがあった。中には目やのどが気になる選手、役員が数人いた。

大会の競技場（杭州オリンピックスポーツセンター）は大きく、きれいな会場で、多くの観客でにぎわっていた（図3)。大いに盛り上がっており、主催者をはじめ国・地域がこの大会自体に大きな期

図1

図2

図3

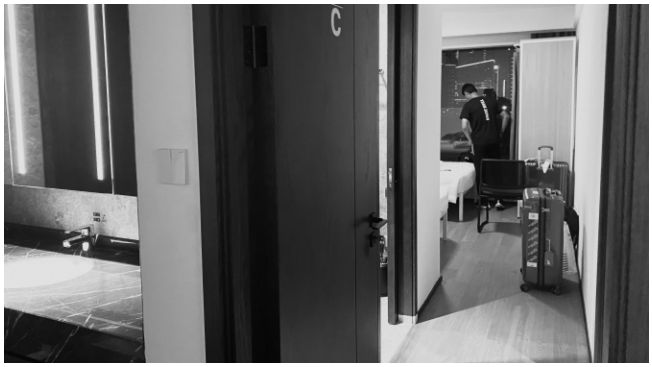

図 4

図 5

図 6

図 7

待を込めていたところを強く感じた。特に中国人選手の登場の場面や競技成績が上位になる際の選手に対する観客からの声援はすさまじかった。その反面、（私の個人的な印象ではあるが）他国選手（特に日本人選手）に対しては、クールな声援であるように感じた。

【環境・会場・選手村】

選手村は以前のバブルのように隔離されているわけではないが、周囲からのセキュリティを守るためにしっかりとガードされていた。競技会場まではシャトルバスで移動していたが苦痛にならない 15 分程度の距離であり、選手村から外に出ると地下鉄の駅などもあり、比較的動きやすい位置にあった。たいへん広い敷地であり、日本選手団が宿泊した建物は、食堂やシャトルバスの乗り場からは少し離れた所にあったため、カートで移動することが多かった。

宿泊施設は充実しており、1 つのユニットにいくつかのベッドルームが分かれており、リビングをシェアーしながら使用した（図 4）。メディカル、役員が使用した居室は 4 つのベッドルームに分かれており、リビングをトレーナーコーナーとして、基本的にはベッドを 2 台置いて使用した（図 5）。シャ

図 8

ワー、トイレの水回りは清潔で、水量も困ることはなかった。バスタブがないため、中にはバスタブ使用を希望する選手もおり、その対応を検討する必要があった。また、各居室のバルコニーには洗濯機もあり、洗濯のストレスも少なかった。

食事に関しては、ビュッフェ形式であり、様々な料理から選択できるようになっていた（図 6，7）ため、困ることはなかった。水、生野菜等には選手にも気を付けるように指示を出していたが、衛生面でも大きな問題はなかったと思われ、アンケート結果からも選手団のなかに腹痛などの食事に関わる問題があったものはいなかったと思われる。ただし、単調な食事が多かったことと、アジア大会なのに残念ながら日本食と言われるようなものがほとんどな

かったため、後半は食事が少し飽きてしまった。選手からは、若干脂っぽい食事が多いとのコメントもあった。ファーストフードとしてピザハット、ケンタッキーがあったが、全体的には人気が高かった。(図 8)

日本選手が滞在するエリアには JOC のサポートが設置されていた。医学的なサポートととしては JOC ドクターによるメディカルルーム、JOC トレーナーによるコンディショニングルーム、アイスバス・温浴・交代浴の設備が作られていた。各選手の居室には浴槽がなかったため、浴槽でのリラクゼーションを希望する選手がいたため、この施設を案内し利用することができた。さらに今回、ウェルフェアオフィサーが帯同していた。これは選手の心理面をサポートするものであり大変心強い取り組みであった。なお、大会主催者が用意している選手村ポリクリニックもあったが、幸いに利用しなければならない選手はいなかった。

その他、日本代表選手団が大会現地で良好なコンディションを維持する為に JOC G-Road Station が設置されていた。これは「和軽食（補食）」を提供し試合前後の栄養面を補強すること、気軽にアクセス（距離・気持ち）できリラックスできる空間として活用すること、を目的としたステーションである。私も訪れたが、日本食の軽食や栄養補助食品が提供され、選手にとっては（私も利用したが）たいへんありがたい実施であった。

【大会前、大会中のサポート】

代表選手決定後はメディカルアンケートを実施し、選手のバックグラウンド、既往、使用している薬剤やサプリメントのチェックを行った。これをもとに、大会期間前より One Tap Sports（図 9）を用いてコンディショニングチェックを行った。1 週間に 1 回登録をすることで、選手のコンディションをチェックし、早い段階から選手とコミュニケーションをとるのが目的である。残念ながら、本大会代表選手の中には、直前にコンディションを崩してしまい出場を断念せざるを得ない選手がいた。

毎回国際大会では、時差に注意をしつつ、移動による疲労や体調変化には気を付けていたが、本大会は移動時間が比較的短く、移動の状況もスムーズであったこと、日本との時差はマイナス 1 時間であったこともあり、移動による影響で体調を崩す選手はいなかった。

入村日と試合 2 日前にコンディションチェックを

図 9

図 10

行い、最終確認を行った。何とかベストコンディションで試合に臨んで欲しかったが、必ずしも万全とは言えない選手もいた。大会後のアンケートでは、「大会に参加するうえで健康上の問題があった」と回答した選手は 21.3%、「パフォーマンス発揮は目標の何％か」という質問では、目標の 80% 以上達成できたとする選手が 14 選手（約 3 割）いたものの、平均は 63.0%、30 点未満は 3 選手と、我々のサポートでもう少し何とかできなかったかと検討する必要がある。

大会期間中は 4 人のメディカルスタッフで分担して会場、サブトラック（図 10）と選手村において対応した。ドクターは一人であったため、別会場でのマラソン、競歩に関しては対応が難しいところもあり、JOC ドクターに協力を依頼し、メディカルサポートとドーピング検査の対応などを依頼した。転倒による外傷もあり複数種目の出場が難しく棄権をした選手、縫合処置をした選手、熱疲労のためレースが万全でない選手もいたが、幸いに重症ではなく、すぐに回復し、今後の活動に大きな影響を及ぼす状況ではなかった。

【ドーピングコントロール】

本大会においてもドーピング検査が行われた。競技会前検査に該当する選手はいなかったが、競技会検査として合計で17名の選手がドーピング検査に該当した。また、1名の選手は日本記録を樹立したことによる検査として実施した。陸上競技場のドーピングコントロールステーション（DCS）にて実施されたが、全体に広く整った空間で、検査を行う個室は十分に用意されており、待ち時間が多くなるなどのストレスは比較的少なかった。大きな国際大会のため、日本より派遣されたDCO（Doping Control Officer）がおり、多くの選手は日本語にて対応していただき、選手も安心して臨めたのではないかと思われる。基本的には尿検査を行ったが、1選手には尿検査の他、血液検査も実施された。ただし、その選手は翌日に次のレースも控えていたため、血液検査は相当なストレスであったと思われる。個人的には、複数種目重なる可能性のあるレースでの採取や検査内容に関しては選手への配慮が必要ではないかと考えたため、DCOにはコメントを残した。

陸上競技場以外で行われた競歩、マラソンでも検査の対象者がいた。その際現地にDCSが設置されていたが、そのDCSも問題のない適切な空間であった。しかしながら、検査対象者を決定するまでの時間が長くかかる場面があり、選手がトイレを我慢するなどの負担が生じていた。こちらに関しても、運営上の配慮を検討するようにお願いした。

全体を通じてTUE（治療使用特例）を申請していた選手や、事前の確認で気になる薬、サプリメントを使用している選手はいなかった。

【まとめ】

第19回アジア競技大会（2022／杭州）の帯同による活動を報告した。新型コロナ感染症がようやく落ち着いた中再開された大きな国際大会の一つであり、大会を通してのメディカルに関する大きな問題はなかった。本大会自体が1年延期され追加となった競技会であり2023年は大きな大会が目白押しであった。世界陸上からも1か月程度しかあいておらず、選手の大会に向けてのピーク設定やコンディション調整はなかなか難しかったと思われる。

「選手を試合のスタートに立てるようにサポートする」の理念の下サポートを行っているが、選手自体が我々の取り組みを理解し、協力していただいてることに関して、感謝の一言である。さらに、強化委員長、監督・コーチ、事務局の皆様にもご協力いただき、大会前より選手をサポートできる体制が整ってきている。2024年はオリンピックイヤーでもあり、これまでの活動を振り返りつつ、選手に寄り添い、ベストな状態をサポートできるよう、医事委員会ではこれからも最大限の努力をしていきたい。